

# 週刊メッセージ “ユナタン” 11

～ こどもの風景 ① ～

平成 27 年 12 月 9 日 片山喜章

今回は、私が最近、出遭った場面です。何気ない子どもの姿のなかに“教えられる事”が潜んでいます。それを見つけ出して洞察するのも保育者の務めだと思います。“如何に子どもに関わるか”という指導性は、“如何に子どもから学ぶか”という姿勢と対になって成り立ちます。

**週刊メッセージ “ユナタン”** は、次回で、一旦休止、します。この“ユナタン”を材料に各園では園内研修をしています。いま発表会に向けて、職員集団が一丸となって取り組もうとしているところです。そんな状況ですから、しばらくの間（発表会終了の頃まで）休止いたします。

## #1 「かごめかごめ」(A 園の園庭風景)

A 園の2階のベランダから園庭を覗き込むと、たくさん子どもたちが、思い思いに遊んでいました。私の視界の隅に、1歳児の女児が、なんと、5歳児の男児の手を引いて、必死に何やら訴えている姿が入りました（帽子の色でクラスがわかります）。すると、その男児は、同じ5歳児の男児を誘って3人になり、まもなく「かごめかごめ」が始まりました。“かごの中のトリ”は5歳児でした。微笑ましい風景ですが、5歳児と1歳児なので、双方ともに飽きがきて、意欲は失せて、遊びは続かないだろうな、と推測しました。しかし、2回した後、さらに1歳児の女児と5歳児の男児が、加わって、5人になりました。驚くのはまだ早く、まだまだ続きます。

そこで、どんな会話がなされたのでしょうか。ベランダから鳥瞰していた私には、そのやり取りを耳にすることはできませんでした。そして、ほどなく、そこに集う仲間たちは、5歳児が8名と1歳児が3名にまで膨れあがっていました。5歳児は、遊んであげているようで、遊び自体を楽しんでいるような、不思議な姿でした。しかし、これがまさに“子どもの世界”なのでしょう。

ここで、私たちが学ぶ点が2つあります。

1つは、園庭で1歳児から5歳児まで、ともに遊ぶ《日常》を設けている事が、とても大切である、と改めて認識できたことです。一般に「園庭で1歳児と5歳児がともに遊ぶと危ない」という理由で意図的に使用時間を分ける園がけっこうたくさんあります。“やむを得ない措置”だと考えてきましたが、ほんとうにそれで良いのか、考え直しが必要です。もしも、A園が、そんなふうに使っていたら、このすばらしい状況は、決して生まれませんでした。豊かな育ち、貴重な経験をしています。「安全」を確保するために、排除されるべき危険は何か（角を無くすのではなく丸くするなど）、どのような危険性をあえて取り込んで、「危険回避力」に育てていくのか、それは、子どもを育てる社会のあり方として、大人たちがもっと議論すべき事柄でしょう。

神戸市垂水区の知人の保育園では、広くない園庭で、毎朝、登園時から9時半まで、0歳児から5歳児まで、いっしょに、自由に遊んでいます。園庭の中央にはドカッと砂場があり、0歳児の子どもが砂場から外へ、紐のついた玩具を引っばって、歩き出したその横を5歳児が、追いかけてすり抜ける場面を見ました。さすがに“危ないな”と感じましたが、よく観察（凝視）すると危険を避ける習性みたいなものが、個々の子どもの中に、そして園の文化の中に備わっているように感じました。「習慣」になるように導くことで、学びは定着する、と思われま

その知人（園長）は、これが、何十年も続いているその園のウリ（方針）であることを力説し、概して、そんな園の事故率は低いとされていますが、まさに、その通りの回答でした。

10年前、法人内のB園の1歳児のサーキットを見学した人たちが、「1歳児には、危険だ、見てられない」と感想を述べられた時、思わず“なんでやねん”と返した事を記憶しています。実際、サーキット運動でケガをする割合は低く、「安全」とは、ほどよく危険を取り込んで「習慣化」することで育まれると考えます。普段、いっしょにならない5歳児と1歳児が、たまに園庭でいっしょに遊ぶ方がはるかに危険です。A園には、1歳児から5歳児まで、毎日、園庭でいっしょに遊ぶ日常がありますから、適応力が身に付き、危険性は下がるのだと言えそうです。

2つ目の学びです。それは、5歳児と1歳児が、どうして、いっしょになって「かごめかごめ」で遊び続けられたのか、という不思議です。これは、上記の理由と関連していると思われま

「毎日、園庭で自由に遊んでいる時に会う顔見知り」であることが大きな要因です。なので“クラスメイト”ならぬ“園庭メイト”で、この時は、たまたま5歳児と1歳児のドラマでした。1歳児の女児は、5歳児たちの「かごめかごめ」に偶然、入れてもらって、それを機に彼女から誘うようになったのかもしれませんが（たいしたものです）。この日、1歳児から誘う姿が見られましたが、誘われた方も困惑する様子はなく、同じ遊ぶなら仲間を集めた方が楽しいと思っただのか、見て楽しそうだから他児が自然に寄ってきたのか、どんな“力学”がはたらいたのでしょ

5歳児と1歳児が混じるような日常を意図した事に加えて、「かごめかごめ」という伝承的なルールのある遊びを（たぶん）保育者が伝えたからこそ、1歳児は5歳児に習い、5歳児は1歳児にわかるように伝える、近い年齢ではなしえない、この“年の差やり取り”を双方が自然に楽しんで、学びの相互作用がはたらいたと洞察します。これは、立派な保育の成果だと思いま

何気ない子どもどうしの風景でも、よく観察し、しっかり洞察すると固定観念が崩れます。

「1歳児と5歳児が、いっしょに活動する（遊ぶ）のは無理」というのは、“思い込み”であると気づかされました。そして、それを捨て去ることの大切さを体験（学習）できました。

「観察力と洞察力を活用する事」、どの分野においても求められる指導性であり、人間性です。